

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔学生懸賞論文発表〕 応募状況と選考過程、選評

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/500">https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/500</a>

# 学生懸賞論文発表

平成三十年度学生懸賞論文の  
応募状況と選考過程

第一部門 (本学文学部・神道文化学部学生、別科在籍者)

入選

羽鳥 佑亮 (文学部日本文学科二年)

日本における貧乏神譚の研究

竹内百合香 (文学部史学科四年)

猪苗代「疏水路実測図」の表現内容と制作目的

第二部門 (本学大学院文学研究科・専攻科在籍者)

入選 〓 本誌八月号掲載予定 〓

張 哲 (文学研究科博士課程後期二年)

博物館学における用語「博物館」の

濫觴に関する一考察

(所属・学年は、応募当時)

國學院雜誌編集委員会

本年度の学生懸賞論文の応募論文数は、文学部・神道文化学部学生・別科在籍者を対象とする第一部門五本、大学院文学研究科・専攻科在籍者を対象とする第二部門二本であった。

選考過程で議論になったのは、表題と内容の整合性、オリジナリティ、問題提起が明瞭であるか否か、結論と照応しているか、論文中の学術上の述語の定義は適切か否か、論証過程に破綻がないか、当該課題の研究史が十分に踏まえられているか、日本語の表現は適切か、などであった。今後、懸賞論文に応募する際には、上記の点に、ぜひ留意してほしいものである。また、本年度の応募論文数は昨年度に比して増加しているが、今後さらに、学生懸賞論文の意義を周知し、意欲的な研究成果が積極的に応募されることを期待したい。

なお、五月一五日に開催された國學院雜誌編集委員会において、査読の結果をふまえて厳正に審査した結果、応募論文三本

を入選とした。三本とも研究論文の水準に達していると評価された結果である。

第一部門（本学文学部・神道文化学部学生、別科在籍者）

入選

羽鳥 佑亮（文学部日本文学科二年）

日本における貧乏神譚の研究

竹内百合香（文学部史学科四年）

猪苗代「疏水路実測図」の表現内容と制作目的

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

入選

張 哲（文学研究科博士課程後期二年）

博物館学における用語「博物館」の濫觴に関する一考察

（所属・学年は、応募当時）

特に第一部門の羽鳥氏は学部の二年生である。卒業論文提出以前に、これほどの高水準の研究論文を執筆され評価されたことは特筆に値する。今後のさらなる研鑽に期待したい。

## 選評

羽鳥 佑亮 (文学部日本文学科二年≡平成三十年度)

### 日本における貧乏神譚の研究

本論文は、日本の「貧乏神説話」を比較することで、各説話に通底する貧乏神の共通点と、各時代における貧乏神の描き方の変化とを考察している。

「貧乏神」は、現代の日本人でもほぼ説明なく理解できる伝承上の存在といえる。その特徴を整理すると、個人または家に憑りついて経済的困窮を招き寄せるとされた、疫病神・厄神の一種である。通常姿は見せないが、絵画等には多くぼろをまとった貧相な瘦せた小男として描かれる。貧乏神の伝承は近世の都市文化の中で発展し、「○○をすると(例・焼き味噌で飯を食うと)貧乏神が来る」等の俗信も生まれた。また、厄介を招くトラブルメーカーを揶揄的に貧乏神呼ばわりする表現も身近である。

このように貧乏神は日本文化においてよく知られた存在でありながら、貧乏神の登場する説話等は数少なく、先行研究も大

島建彦・宮田登・小松和彦ほかの論考があるものの、いずれも厄神研究や福神研究、絵巻物の図像研究の延長上で貧乏神に触れているのが実状で、研究が盛んとは言い難い。本論はそうした貧乏神説話の整理と話型の析出を試み、十分に成功したといえる。

本論は、鎌倉時代前期の仏教説話から明治初期の怪談説話集に至るまでの二〇話の貧乏神説話を詳細に検討し、貧乏神説話の話型が時代を追って「追跡型」「福神入替型」「追出失敗型」「祀り上げ型」「追出型」「焼味噌型」「家移型」と変化すると整理している。資料の読み解きと論旨には十分な説得性があると同時に、各時代において貧乏神がどのような存在としてイメージされていたかを捉えるための指針ともなる。また伝承において貧乏神は統一性のない多様な特徴を有しているが、それが時代ごとの貧乏神イメージの混合であることも明らかになったといえる。

以上の点を評価し、本論文は入選に値すると考える。

竹内百合香（文学部史学科四年Ⅱ平成三十年度）

猪苗代「疎水路実測図」の表現内容と制作目的

本論文は明治前期の安積疎水開削事業に関連して作成され、筆者が「疎水路実測図」と総称する十一枚の実測絵図について、絵図に描かれた図像や景観の詳細な検討を通して疎水工事における絵図の位置づけを明確にし、計画の立案から実地調査によるルート決定そして着工にいたる疎水工事の流れを明らかにした力作である。

論文は三章から構成され、第一章では、安積疎水に関する先行研究が主に二次資料に基づいて行われたことを述べ、分析対象として取りあげた「疎水路実測図」が疎水幹線の計画路線を描いた一次資料であることを指摘する。第二章では、絵図に付された凡例の図像記号から「掘割」「隧道」「堤」「分水」などや構造物である「掛樋」「伏樋」の位置と表現内容を綿密に検討し、さらに疎水開削後に作成された書類の内容とも比較検討して描かれた絵図の内容の正確さを立証するとともに、安積疎水事業が計画段階に制作されたこの実測絵図に基づいて進められたことを明らかにした。

論文の中心となる第三章では、筆者は「疎水路実測図」と関

連文書の記載内容との比較検討から絵図の制作時期の特定を試みた。安積疎水の設計者として顕彰されてきたオランダ人技術者ファン・ドールンによる調査以前に、すでに日本人技術者による実質的な測量が開始されていたが、筆者はファン・ドールンが疎水の計画段階から関与していたことを指摘する。ただしファン・ドールンによる明治十一年の実地検分は、猪苗代湖からの取水口に関してであり、疎水の幹線・分水路の調査はなお不十分で疎水ルートはまだ定まっていなかった。筆者は関連文書類の記載事項の詳細な比較分析を通して、「疎水路実測図」の制作時期をファン・ドールンの基本設計書が提出された明治十二年一月から山田寅吉の実地調査が行われた同年六月までの間と結論づける。この時期に疎水建設の概算予算の作成と疎水ルートへの検討が絵図制作と同時に行われたという。この結論は極めて妥当であり、その論証過程も納得できるものである。

また絵図中の図像表現をもとに、水路のルートと工法を既存の農地や水路を損なわないよう配慮して決定していたという指摘は貴重である。安積疎水に関して、これまで二次的史料のみ依拠して研究が積み重ねられてきたところに、新たに実測絵図の綿密な分析に関連文書の記載事項を突き合わせて、疎水ルート立案から工事実施に至るまでの流れの解明を試みたこ

とは極めて高く評価されよう。ただし卒業論文をもとに書かれた論文であるため、文章表現においてはやや稚拙な点がみられるが、論文の内容の価値を下げるものでは決してない。

最後に、ないものねだりではあるが、安積疎水の「掘割」、「隧道」、「堤」、「掛樋」、「伏樋」などの構造物について、実測絵図の表現と現地調査をもとにした疎水の歴史的景観についての考察も盛り込んでほしかったということを付け加えておきたい。

令和元年度 國學院雜誌学生懸賞論文募集

一、応募資格…第一部門（本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者）

第二部門（大学院文学研究科・専攻科在籍者）

一、枚数…四〇〇字詰四〇枚〜五〇枚以内（図表含む）

厳守

一、テーマ…題目は問わない。

但し、未発表学術論文に限る

（卒業論文も可。ただし規程の枚数に収めること。）

一、締切日…令和二年三月末日（当日消印有効）

一、入選…賞状ならびに副賞（五万円）

佳作…賞状ならびに副賞（三万円）

一、発表…入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に

掲載予定

一、選考…國學院雜誌編集委員会

一、投稿先…國學院大學文学部資料室

詳しくは本誌表紙裏面を参照